

# 非在の〈母〉を求める物語——泉鏡花「龍潭譚」論

市川 紘美

はじめに——母子合一化は果たされたのか

明治二十五年十月、泉鏡花は「日出新聞」において「冠弥左衛門」を発表し、同時代の文壇に登場する。明治二十八年四月に発表された「夜行巡査」に代表されるように、当初は観念小説的作風を高く評価されるが、翌二十九年の「一之巻」以降の連作や「蓑谷」などの少年の〈母性憧憬〉や異界への訪問譚という幻想小説的作風へと移行することとなる。本論において取り上げる「龍潭譚」（文芸倶楽部 第二卷第十三編 小説六佳選）明治二十九年十一月）も同時期に発表されたテキストであり、先のような要素を多分に含んでいる。また、テキスト中の九ツ餅での不思議な一夜は、後の「高野聖」のプロトタイプとも目されてきた。泉鏡花テキストのなかでも、まさしく本作は転換期的テキストとして位置づけられるのである。

「龍潭譚」は次のような物語を内包する。

実母を亡くした「われ」は姉の言いつけを守らずにこっそりと家を出て、一人で野道歩きを楽しんでいた。その途中、斑猫という虫の毒によって顔が變形してしまい、「われ」を探しに來た姉さえも弟の「千里」だと判別できずに去って行ってしまう。途方に暮れて彷徨っていた「われ」は大沼のほとりで倒れるが、とある美しい女に介抱されて

九ツ餅という場所で不思議な一夜を過ごす。

明くる日、女の使いである老夫に連れられて「われ」は里の家へと戻るが、後見である叔父から魔に連れ去られた「つまゝれ」と呼ばれ、友人からも邪険にされる。姉までもがそのように接し、くなくったかのように感じ、九ツ餅の女のもとに戻りたいと願うほどであった。姉に連れられて詣でた寺院での祈禱のなか、御仏の下で姉の胸に抱かれた彼は自分たちの姿を御仏と重ねることでの心の平安を取り戻す。一方、その夜の暴風雨によって女がいる九ツ餅は一夜にして水底に沈むのであった。

主人公が山中において妖しの美女に遭遇するという趣向は、「龍潭譚」以前の鏡花テキストにも見受けられるものであり、発表当時も「おなじ作者の文に蚩沢とか何とかいふのがあつた。(中略)若しあれとこれと並べて見たら、重複の太甚しいもの」と「簑谷」<sup>(i)</sup>と思われる作品との類似が指摘されている。また、「一之巻」以降の観念小説的作風からの変化は「纖弱拙劣見るに堪へざる」<sup>(ii)</sup>と批判の標的とされた。<sup>(iii)</sup>

発表当時は同時代の批評家たちに厳しく批判された作風の幻想性であるが、その後も幾度となくこうした作風は繰り返され、結果的には鏡花テキストの真髄として高く評価されてゆくこととなるのは周知の通りである。鏡花研究史でもその評価軸は同様であり、「鏡花の亡母憧憬の神秘化」<sup>(iv)</sup>と評された本作は、特に「われ」の「亡母・母性憧憬」<sup>(v)</sup>と禁忌侵犯を契機とする異界への「神隠し」譚<sup>(vi)</sup>という視座のもと様々に論じられてゆく。<sup>(vii)</sup>

そのような流れのなか、鈴木啓子氏は「母子未分化」や「母殺し」といった先行論の読み疑問を投げかける。ユング派の河合隼雄氏が説いた「水底の三幅対」<sup>(viii)</sup>を援用する脇明子氏の論をもとに、鈴木氏は「千里の『父性獲得の物語』『自我形成の物語』」<sup>(ix)</sup>という新たな論を展開した。鈴木論文では、テキスト末の暴風雨は「僧たちの呪法によって呼び起こされた『ウロボロスの父性』としての龍神の顕現」<sup>(x)</sup>であり、それによって『叔父―姉―弟』というこの世の

秩序が『老翁―母―息子』という水底の秩序に作り替えられ、姉と千里との間に聖なる『兄妹婚<sup>マ</sup>』が成立した」という読みを提示している。だが、「近親相姦のタブー」を犯すことによる「われ」の「自我形成」を指摘する同論文にはテキストから離れた解釈も含まれており、深読みの観も否めない。

「龍潭譚」が〈亡母・母性憧憬〉及び〈母恋〉という鏡花テキストの重要な要素を多分に含んでいることは先行諸論が示すところである。そのようなコードのもと、テキスト末の「姉上」が「われ」をその胸に抱くという行為は、「姉が母の形代になり得た」ことによって亡母憧憬に迷う「少年の欠落感を慰撫し、その《迷い》を解消させた」、<sup>(xii)</sup>「摩耶夫人像そのままの『母』と少年の合一」、等<sup>(xii)</sup>というように、「われ」と〈母〉との合一化が果たされた物語として読むのが定説とされてきた。だが、本作を母子合一化の成就、あるいは「われ」の「自我形成」がなされた物語といえるのか疑問が生じる。

先行諸論が論じてきたように、「われ」は〈母〉を獲得してその渴望を満たし得たのか、又は〈母〉から解放されて「自我形成」し得たのか。本論ではテキストの物語に沿いながら、「われ」と〈母〉を当て嵌められてゆく対象との関係について順々に考察し、更に語る「われ」によって語られる「われ」のあり方と母性希求との関わりについても検討することで、その成否を再考する。

## 一 「優しき」姉上

テキスト冒頭から、姉の言いつけを破って一人で野道歩きをする「われ」の様子が語られる。「われ」の「母上」は既に他界しており、彼は難しい文字が上手く書けたのを特に「姉上」に見せたいと欲する。また、「われ」が遊びに出る際に、その帯の結び目を姉が叩いておけば、それで彼女が「母上」の「魂」が入るために「魔<sup>エテ</sup>」も手出しができな

いとも語られる。最大の庇護者である「母上」が亡くなった後、姉が「われ」の親和感情を集中的に受け、重要な存在になっていったであろうことが推測される。だが、母代わりを務めていたはずの「優しき姉上」には、「われ」が求める〈母〉としての役割を十全には果たしえないという欠陥もあった。

「母上」の死後は、姉が弟を寝かしつけていたようだが、「乳をのまむといふを姉上は許したまはず」、「ふところをかきぐれば常に叱りたまふ」と語られるように、彼が乳房に触れることだけは決して許さなかった。このことは、母代わりの姉の与える母性には、その最も核心部分に欠如があったということを意味する。「弟に乳房を許すことは日常秩序的圏にあっては性的禁忌に抵触」する、<sup>(iii)</sup>「触れられぬ乳房は、姉が偽りの母であることの動かぬ証拠となり、母なるものの不在の根源的な象徴となる」、<sup>(xiv)</sup>等と指摘されてきたように、与えられない姉の乳房は「われ」の望みと姉の授与とが非対称であったことを象徴している。

そのような状況下でも、「われ」は姉を母代わりとして「優しき姉上」と呼んで慕っていた。にもかかわらず、「われ」に姉を「いつはりの姉」と呼ばせて、九ツ罅の女を求める衝動を誘発させたものとは何か。

「われ」は「一人にては行くことなかれ」と姉から言われていたにもかかわらず、こっそりと家を出て野道歩きを楽しむ。その野道歩きの最中も「色彩あり光沢ある虫は毒なり」と姉が教えていたことを「ふと」思い出し、一度はそのまま打ち置いて引き返す。が、にもかかわらず、先に投げて碎けた石を目にした途端に「俄に心動き」て斑猫を打ち殺してしまう。姉の言いつけを二度も破り、「かたる」の子どもと遊ぶという友人との約束事も破る「われ」は、タブーを破ることで日常世界の約束事から抜け出し、非日常的時空間の奥深くへと足を踏み入れてゆくこととなる。

日の傾きつつあるなか、「われ」は躑躅が咲き乱れる道へと迷い込み、心細さから涙ながらに「あるほど声を絞って」

姉を求める。だが、その姉を目の前にして姿を現すことに躊躇してしまう。自分自身でさえその理由は分からないままに後を追うが、その姿は最早なく、代わりに銀杏の下に女の後ろ姿を見つける。姉に似たその姿に声をかけようとするも、またもや声をかけることができない。それなのに、その姿が見えなくなると「なほなつかしく」、言葉をかけなかったことを後悔する。「われ」は姉を強く求める感情を抱きつつも、自ら進んで姿を現す、声をかけるといった行動を起こすことはない。この相反する「われ」のありようには、自分からではなく、姉から自分を見つけてほしいという受動的な〈甘え〉の感情が窺える。後に詳しく述べるが、「われ」は彼が求める〈母〉に全知的・庇護的な役割を求めており、姉にもそのような要求が働いていたと推測できる。しかし、見つけてほしいのに見つけてもらえないという体験は再び彼の眼前で繰り返されてしまう。

姉は再び「われ」がいる境内へと戻ってくるが、斑猫の毒によって顔が変容した彼を弟の「千里」であると気づかないばかりか、「あれ！」<sup>(xv)</sup>と言って一步退き、「違つてたよ、坊や」とだけ言い捨てて走り去る。「われ」は泣きながら追いかけるが、姉に追いつくことはできない。

後に九ツ餅から里の家へと「われ」が戻った際も、姉は彼を氣遣う素振りを見せるものの、その一方で彼を打ち、「私あもう氣でも違ひたいよ」とまで言う。

一つのわれにはかはらじを、何とてさはあやまるや、世にたゞ一人なつかしき姉上までわが顔を見るごとに、氣を確に、心を鎮めよ、と涙ながらいはるゝにぞ、さてはいかにしてか、心の狂ひしにはあらずやとわれとわが身を危ぶむやう其毎になりまさりて、果はまことにものくるはしくもなりもてゆくなる。

(ふるさと ※傍線、及び傍点は引用者による。以下同様)

「世にたゞ一人なつかしき姉上」が、「われ」の親和感情を裏切る言動を繰り返すことによって彼は姉に失望を覚える。それによって彼は自分が本当に「ものくるはしく」なったかのように感じるのである。つまり、「われ」の心の乱れは、このような姉との相反する関係において引き起こされたものと少なくとも「われ」には理解されているのである。

口惜しく腹立たしきまゝ身の周囲はことごとく敵ぞと思はるゝ。町も、家も、樹も、鳥籠も、はたそれ何等のものぞ、姉とてまことの姉なりや、さきには一たびわれを見て其弟を忘れしことあり。（中略）さればぞ姉がわが快復を祈る言もわれに心を狂はすやう、わざと然はいふならむと、一たびおもひては堪ふべからず、

（ふるさと）

「われ」は先に姉が見誤ったことを思い起こす。姉は「われ」に絶対的な庇護者である〈母〉を当て嵌められるが、その外見においても内面においても「われ」というものを見出し名指すことはできなかったのである。乳房を口に含ませてくれた九ツ罇の女のもとに戻りたいという「われ」の衝動は、姉よりも九ツ罇の女に対して母性幻想をより強く発動させられたことを明かしているのだ。

「われ」が求める母性幻想を全的な形では受けとめ充足させきれない「姉上」のありようは、テクスト末の寺院での祈祷の場面において象徴的に語られる。そこでは、「われ」は〈母〉を姉ではなく御仏に当て嵌めて見ることとなる。この直後、彼の姉に対する呼び方から「優しき」、「いつはり」といった姉への主観的な言葉が一切とれ、単なる「姉、

上」に統一されることには注意しなければならない。この呼称の変化は「われ」の姉に対する見方の推移をも暗示するものである。

「優しき」という言葉にしても、「いつはり」という言葉にしても、「われ」の姉に対する依存的な感情が見え隠れするものである。「姉上」が「われ」をその胸に抱いたことによって母子合一化が果たされたのであるならば、彼の姉に対する親和感情も同時に回復され、その呼び方にも何等かの主観的な言葉が再び繰り返されるはずである。だが、テクスト末に姉が後に「関屋少将の夫人」となったことが語られるのみで、そこに何かしらの親和感情を認めることはできない。このような変化は「われ」の内に生じたままの姉に対する距離感を浮き上がらせることとなる。それまで執拗に繰り返していたにもかかわらず、「われ」は自身の主観による強制的な価値基準を姉に与えることはしない。そうすることによって、彼は「世にたゞ一人なつかしき」姉に〈母〉を当て嵌めることなく、彼女を「関屋少将の夫人」という他所の人物として語り得るのである。

## 二 「うつくしき」女たち

姉では満たされない「われ」は、姉以外の女にも〈母〉を当て嵌めてその空虚さを埋めようとする。隠れ遊びをした際に自分を導いた女や九ツ餅の女がそれであるが、この見知らぬ女たちには共通する特徴がみられる。

「かたる」の子どもたちと隠れ遊びをした際、鬼の役となった「われ」は、隠れているはずの子どもたちを見つけることができない。そのような状況下で声をかけてきた女に、「われ」は「いさゝかもためらはで」従う。子どもたちを見つけられずに一人で途方に暮れていた「われ」は、自分を発見し認めてくれたこの見知らぬ女を頼りにするのである。この一見すると不用意とも受け止められる「われ」の行動のなかに、女に対する親和感情の発露が窺えるのであ

る。

「われ」はこの女の印象を「見知りたる女にあらねど、うつくしき顔の笑をば含みたる、よき人」とし、その眼を「瞳は水のしたゝるばかり斜にわが顔を見て動けるほどに、あきらかに其心ぞ読まれたる」と語っている。「われ」の女への視線は、もっぱらその顔の美しさ、それと全知性や庇護性を感じさせる眼とに向けられているのだ。後に「われ」はこの女を思い起こして、「さるにてもさきの女のうつくしかりし顔、優かりし眼を忘れず」とも語る。「心迷ひ」ている自分を見つけ出し、手を差し伸べてくれた女に対する親和感情は、ほんの少ししか見ていないはずの女の様子をまざまざと描き出すという想像的な力として作用してゆくのである。このような想像力の働きは、自分を見つけて救ってくれた九ツ罇の女に対しても同様に、しかもより活発に作用する。

ちかまさりせる面けだかく、眉あざやかに、瞳すゞしく、鼻やゝ高く、唇の紅なる、額つき頬のあたり臍たけたり。こは予てわがよしと思ひ詰たる雛のおもかげによく似たれば貴き人ぞと見き。年は姉上よりたけたまへり。知人にはあらざれど、はじめて逢ひし方とは思はず、さりや、誰にかあるらむとつくぐみまもりぬ。

(五位鸞)

「われ」は未知の九ツ罇の女を既知のものと感じ、その印象を「雛」に喩える。實在の〈誰か〉ではなく、〈誰にでも〉なりうる「雛」というもの、イメージに重ねて見ているのだ。また、九ツ罇の女は「われ」の身に起きたことをなぜか知っており、後に「われ」は「わが胸の中はすべて見すかすばかり知りたまふやうなれば」とも語る。窮地を救ってくれた九ツ罇の女に全知性や庇護性を感じ、素直に従う「われ」の姿勢は、境内で遭遇した女に対する無防



備なそれとも重なるものである。

女たちから眼差しを受けた際、「われ」は「うつくしい」や「優しい」といった主観的イメージで先ずは捉え、その上で自身との関係性において全知的・庇護的となりうる女性に親和感情を抱き、惹きつけられていったことが窺える。そして、「われ」はそのような対象に自身の抱く〈母〉像を当て嵌めてゆくのである。

ひとたび〈母〉としてのイメージを付与された九ツ罅の女は、「われ」の母性幻想の中核にある乳房を「われ」に含ませる。しかし、女の乳房を口に含むが「たゞ淡雪の如く含むと舌にきえて触るゝものなく」、乳房の下に強く額を押して当てるも、「顔にはたゞあたゝかき霞のまとふばかり」である。女から「われ」に働きかけた際にはあつたはずの身体は、「われ」が働きかけようとすると消失してしまう。女の〈乳房〉もまたイメージに過ぎないために、その乳房に触れた実感を「われ」が得ることはできないのである。

実体がない女に「われ」が接近、接触することは叶わない。日常の世界においても、「夢幻ゆめまろしともわかぬ」非日常の世界においても、「われ」が求める〈乳房〉を含ませて彼の空虚感を埋めることのできる〈母〉は存在しないのである。受動的にしか触れられないことに「心着」いた「われ」に、更なる喪失体験が待ち受ける。「母上」の死という、彼の喪失の起源となる体験が眼前で再現されるのだ。

片手をば胸にあてて、いと白くたをやかなる五指をひらきて黄金の目貫キラ／＼とうつくしき鞘の塗の輝きたる小さき守刀をしかと持つともなく乳のあたりに落して据ゑたる、鼻たかき顔のあをむきたる、唇のものいふ如き、閉ぢたる眼のほゝ笑む如き、髪のさら／＼したる、枕にみだれかゝりたる、それも違はぬに、胸に剣をさへ

のせたまひたれば、亡き母上の爾時のさまに紛ふべくも見えずなむ、コハこの君もまかりしよとおもふいまはしさに、はや取除けなむと、胸なる其守刀に手をかけて、つと引く、せつばゆるみて、青き光眼を射たるほどこそあれ、いかなるはずみにか血汐さとほとばしりぬ。(中略) うつくしき人は寂として石像の如く静なる鳩尾のしたよりしてやがて半身をひたし尽しぬ。おさへたるわが手には血の色つかぬに、灯にすかす指のなかの紅なるは、人の血の染みたる色にはあらず、訝しく撫で試むる掌の其血汐にはぬれもこそせね、こゝろづきて見定むれば、かいやりし夜のものあらはになりて、すゞしの絹をすきて見ゆる其膚にまとひたまひし紅の色なりける。いまはわれにもあらで声高に、母上、母上と呼びたれど、叫びたれど、ゆり動かし、おしうごかししたりしが、効なくてなむ、ひた泣きに泣く／＼いつのまにか寝たりと覺し。

(渡船)

当初、「われ」は「うつくしき人」と「亡き母上」とを重ねて見つつ、両者を区別して認識し得ていた。両者を分ける境が彼の内面で消滅したのは、血の色と思つたのが女の纏っている衣の色であつたことに「こゝろづきて見定」めた直後のことである。両者の境界を融解させてしまうほどの衝撃がここで彼を襲つたのだ。だが、どんなに「われ」が求めても彼にとって実体のない存在である女が身動きすることはない。

高橋昌男氏は、この「母上」の死の再現を「われ」による「《母》殺し」と解釈する。<sup>(xvi)</sup>「われ」が自らの手で死を与えることで「《母》を自分のもの、自分だけのものにすることができた」のであり、それは「《母》の呪縛から解き放たれる」ことでもあると、高橋氏は論じている。刃物を凶器とした殺人行為は、刃物という小さな道具もとも「われ」と《母》とが接近、一体化するという側面をもつ。その意味では、「われ」による「《母》殺し」は母子合一の成就とも解釈できる。だが、果たして「われ」は《母》を殺し得たのだろうか。

確かに「胸なる其守刀に手をかけて、つと引く、（中略）いかなるはずみにか血汐さとはとばしりぬ」とあるように、「われ」の手によって女が傷つけられたかのように語られてはいる。しかし、繰り返し述べてきたように、「われ」に對して実体を備えていないこの女には切り裂く肉体がそもそも欠如しているのではないか。流れ出る血汐に見えたのは女の衣の色であり、刃を刺した手応え、血を流す肉感の生々しさといったリアリティも欠落している。このような女の存在の不確かさは、彼が〈母〉との合一化を果たすことも、又は殺すことも当初より不可能であることを表している。血の色ではなく衣の紅の色だと気づいた直後に「ひた泣きに泣くく」「われ」の姿は、〈母〉の回復がこれ以上はなされないことを突きつけられた悲しみを物語っているのである。

### 三 「ほゝゑみたまふ」御仏

満たされない欠如感を抱いたまま、里の家へと戻った「われ」は、「魔」に連れ去られた「つまゝれ」として人々に邪険にされる。姉までもが顔を見る度毎に「心の狂ひたるもの」として扱い、「われ」は「心地死ぬべく」ような状態に陥る。彼は姉に連れられて寺院へと詣でるが、本堂の外は激しい暴風雨で雷までが鳴り響く。

からだひとつ消えよかしと両手を肩に縫いながら顔もて其胸を押しわけたれば、襟をば搔きひらきたまひつゝ、乳の下にわがつむり押入れて、両袖を打かさねて深くわが背を蔽ひ給へり。御仏の其をさなごを抱きたまへるも斯くこそと嬉しきに、おちゐて、心地すが／＼しく胸のうち安く平らになりぬ。

（千呪陀羅尼）

右の場面は「われ」の母子合一化の根拠として度々引かれてきた箇所である。だが、姉に抱きかかえられた「われ」

の幸福は、それ自体の個別的体験、一回性の確かな手触りのある体験としては語られない。「われ」は、摩耶夫人、又は鬼子母神と覚しき御仏と同じ母子像の姿になったことに、すなわち理想的な母子像という、いわば図式のなかに自分を組み込めたことに満足を得るのである。<sup>(xvi)</sup>「われ」は姉にではなく御仏に〈母〉を当て嵌めて見ているのだ。だが、彼は乳房を口を含むという行為を欲していたのであり、ここで得られた心の平安も一時のものであって、彼の空虚を充足することはない。

端嚴微妙のおんかほばせ、雲の袖、霞の袴ちら／＼と璽珞をかけたまひたる、玉なす胸に纖手を添へて、ひとと、をさなごを抱きたまへるが、仰ぐ／＼瞳うごきて、ほゝゑみたまふと、見たる時、やさしき手のさき肩にかゝりて、姉上は念じたまへり。

(千呪陀羅尼)

御仏の瞳が動き、微笑む。動くはずのない像の眼が動き、自分に微笑むと見るこのような語りは、「をさなご」を抱く御仏の眼に「われ」が先の女たちと同様、全知性や庇護性を感じとり、想像的な力を作用させていることを示すものだ。「いつはりの姉」と呼んでいた姉の手を「やさしき手」と語るのも、御仏が微笑みかけたと見たのと同時にその手が触れ、最善なる〈母〉である御仏と一瞬間、重なったためであろう。

「われ」は九ツ餅の女を「たふときうつくしきかのひと」と呼んでいたが、女と過ごした一夜においてその胸に抱かれた際も、この母子像と同様の姿であったことが思い出される。つまり、〈母〉に抱かれる〈子〉というこの構図には三つのパターンが重ねられるのだ。言うまでもなく〈子〉には「われ」が、それを抱く〈母〉には姉と九ツ餅の女、そして御仏とが重ねられるのである。「われ」によって彼の〈母〉イメージへと当て嵌められてゆく三者は、姉と御仏

とに對峙する九ツ罅の女という二項對立の図式で捉えられることが先行諸論では多々みられる。<sup>(xix)</sup>しかし、「われ」自身が九ツ罅の女を魔性のものとして語ることはなく、「われ」が求める〈母〉にはなりえないという点でも三者は共通していることから、三者は彼にとつては並置する存在であるといえる。御仏に幻想の〈母〉のイメージを当て嵌めたとしても、微笑みかけたと見えたのはそれを求める「われ」によって加工された出来事に過ぎないのだから、触れることもできなければ、その胸に抱きとめられることもない。御仏というこの最善にみえた母像は、むしろその存在の超越性において獲得不可能な非在の〈母〉そのものを象徴するのだ。

日常的時空間においても、非日常的時空間においても、「われ」の空虚感が満たされることはない。<sup>(xx)</sup>「われ」は〈母〉のイメージ、あるいはそれを当て嵌める対象を追い求めるが、実際の「亡き母上」の顔や記憶について具体的に語ることはないのである。彼にとって実在の「母上」は乳房の触感と死に他ならない。この生きた全体像を欠落した不在の「母上」像のために、「われ」はその内面で非在の〈母〉の幻想を育み、それを追い求めるのである。<sup>(xxi)</sup>「われ」によって創り出された非在の〈母〉は、枠組みのみを与えられた存在、実体を伴わない空虚な存在である。それ故、〈母〉に当て嵌められる女たちは、実在の「母上」の代替者というよりは、「われ」の抱える空虚な〈母〉幻想を埋めるべく手繰り寄せられるイメージなのである。

姉から女たち、そして御仏へと繰り返して〈母〉を追い求めてゆくなかで、「われ」はその非在の〈母〉へと近づいてゆくかのようにみえる。だが、そもそも彼の内面で創り出された非在の〈母〉というその本体が「空虚」である以上、どんなに近づいてもそれを獲得することは不可能なのである。転々と対象を置き換えながら〈母〉を追い求め続ける、「われ」の満たされることのない欲望<sup>(xxii)</sup>が、「龍潭譚」というテキストを起動、進行させる動力となるのだ。姉に

抱かれたことによって「母性追慕の彷徨」は「安住の地を見出した」<sup>(xv)</sup>のではない。どこまで求めても「われ」にとつての「安住の地」など存在しえないのである。<sup>(xv)</sup>

#### 四 空白化される「われ」

「龍潭潭」ではテキスト末尾の直前まで一人称の語りに貫かれ、その主体は「われ」<sup>(xvi)</sup>と表される。テキストにおいてこの「われ」という語は四十九例みられるのだが、最初に「われ」という主体が語られるのは薪を担いだ男とすれ違う場面においてである。道を通される目的語<sup>(xvii)</sup>として「われ(を)」は初めて姿を現す。一方、「われ」がテキストで主語として初めて立ち現れるのは、同じ「躑躅か丘」の中盤、斑猫に石を投げつけるも当てることができずに苛立ち、「われは足踏して心いらてり」と語る一文においてである。しかし、この主語として語られる「われ」は、斑猫の動きに反応して苛立つ状態を受動的な述語と結びつけて語られたものである。

「われ」という語は全体の四十九例のうち二十一例が主語であり、その大半が受身的な述語と結びつく、あるいは文脈から捉えると自身の他者性を露呈する文章や、他者からの働きかけを受ける文章において用いられていることが分かる。また、十九例が目的語として用いられてもいる。つまり、「われ」という語は能動的な主語として立ち現れることが極めて少なく、他者からの働きかけを受ける対象となることで目的語としても立ち現れてくるという特徴をもつのである。<sup>(xviii)</sup>ここに主人公による一人称の自己語りという形式を取りつつも、主体的というより受身的に「自己」<sup>(xix)</sup>を語る、語り手・「われ」のありようが浮き上がる。

確かに泉鏡花テキストで描かれる主体は受動的なものであることが多く、また同時代的背景や文語体ということから主語が省略されやすいとはいえよう。だが、語られる「われ」が自身を満たし得る対象を追い求める姿勢に強い積

極性を有するのに反して、それを叙述する語り手・「われ」の言葉は受動性で覆われている。非在の〈母〉を求める物語を語る「われ」は、自らの手で欲望を充足させることができない受動的な存在、他者から働きかけられる対象としてではないと「われ」を語ることが難しいといえるのだ。そしてそのような受動性は、「われ」が追い求めてゆく欲望と分ち難く絡み合いながら語られる。自身の存在の根源に位置するはずの〈母〉を求める切迫感が、こうした語る「われ」と語られる「われ」との間に生じた差異から表出してくるのである。

「龍潭譚」というテキストでは、欲望を求める主体として能動的に語られるべき「われ」が、語る「われ」によって受動的に語られる。ではなぜ、語り手の「われ」はそうように語ってしまうのだろうか。

「ふるさと」において、叔父が「われ」の後見であると語られており、「われ」の母ばかりでなく父も既にこの世にはないことが推測される。また、叔父に捕まえられた際には、「また庭に引出して水をやあびせられむかと、泣叫びてふりもぎるに」と語り、叔父が戒めを解いてはならないと話すのを聞くと、「隙だにあらむにはいかでかこゝにとどまらるべき」と語る。語る「われ」は、テキストのなかで唯一、この叔父のみを「奈四郎」とその名前で呼び、語られる「われ」が父代わりであるはずの叔父を拒否する様を繰り返し語るのである。<sup>(xy)</sup>

父代わりを拒否して〈母〉を求め続ける〈われ〉には、その目を外部へと向けさせる存在が欠落している。九ツ筈から戻るも人々に邪険にされた際に、「われ」は「町も、家も、樹も、鳥籠も、はたそれ何等のものぞ」とさえ語るのである。外の世界へと向けられない欲望は内側へと向かうしかなく、同様にその対象も既に存在するものではなく非在の〈母〉へと向けられてゆく。どんなに追い求めてもその欠如を埋めることができない〈われ〉という存在は未完成なまま、欠如したままなのであり、それ故に自身を能動的に語ることが難しいのである。

語り手・“われ”はテキスト末尾にて突然、物語の外部に位置する無人称の語り手にその位置を取って代わられてしまうわけだが、それまで語られていた物語の時点から「海軍の少尉候補生」として成長するまでの語りは一切無い。更には語り手・“われ”の現在時も、どの時点に位置するのか定かではない。「年つもりて、嫩なりし常磐木もハヤ丈のびつ」と常緑樹を引き合いに出しながら、「草生ひ、苔むして、いにしへよりかゝりけむと思ひ紛ふばかり」と語られるように、その時間は無時間化される。そして、語る“われ”の在処は曖昧にされたままにテキスト上から彼は消失するのである。空虚な欲望に向かう「われ」を受動的な存在として語ってしまう、語り手の“われ”もまた空虚な存在であるといえるのだ。欠如を埋めるはずの欲望の物語に絡め取られ、そこから脱しえないままに消失してしまう語り手・“われ”のありように、その自己語りが時空間を交錯する理由を求めることが可能であろう。

自ら物語を語り収めることができないままに消失する“われ”に代わり、テキストの物語を収束させるのが無人称の語り手である。この新たな語り手から眼差しを受けた際、語られる「われ」は内面についての語りを一切欠いた、いわば空白化した「海軍の少尉候補生」という役割へと転換させられる。<sup>(四)</sup>この時、語る“われ”と共に語られるべき「われ」の内実もテキスト上から掻き消されてしまうのである。

先に「海軍の少尉候補生」を「われ」と結びつけて述べたが、それが「われ」自身の成長した姿であるとは、実はテキストのどこにも明記されてはいない。ではなぜ、両者は連続した存在として捉えられるのか。それは、それまでテキストを読み進めていた読者が、纏りのある物語として一篇を読もうとするからである。読者の内にある物語に因果関係を求めようとする欲求によって、突然現れたこの未知の「海軍の少尉候補生」は既知の「われ」の延長線上に置かれる。ここで論者が問題としたいのは、このような読書行為に内在する欲求についてではない。こうした欲求によって気づき難くされている「われ」の行方であり、その内実が見事に語り落とされているという事実の方である。



九ツ罅での体験を経た〈われ〉が成長し〈自我〉を形成したと保証する言葉が語られないまま、テキストは閉じられる。語る「われ」も語られる「われ」も最終的に消失し、空白化される主体が、「自我形成を遂げた」<sup>(四)</sup>ともしないとも言えないのである。

### おわりに――<sup>あわい</sup>間にたゆたう〈われ〉

「龍潭譚」というテキストでは、語る「われ」によって受動的な主体である「われ」が〈母〉を追い求め続ける物語が語られる。「われ」は実在の「母上」を喪失しているが、その母との記憶、原体験が語られることはない。彼の母像となるべきはずの「母上」には具体像が欠如しているのである。その欠如を埋めようと、彼は母性幻想のもとに〈母〉イメージを創り出す。しかし、彼によって生み出された〈母〉に実体があるはずもなく、母性を象徴する〈乳房〉と全知性、庇護性といった枠組みのみが与えられる。触れることのできない〈乳房〉に象徴されるように、いかなる女たちをこの〈母〉に当て嵌めても、空洞化された非在の〈母〉になりうる者など存在しないのである。

このような濃密な物語を語る「われ」の現在時は曖昧にされ、更にその存在も空白化される。それでも〈母〉を求めてしまう空虚な「われ」は能動的に〈自己〉を語ることができないままに物語へと立ち返り、自己語りをするのである。「龍潭譚」ではテキスト末において、それまで語られていたことが一気に過去化される。過去を自ら〈語り直す〉という行為は、現在の自分というフィルターを通して過去を編み直し、自身のなかに一連の納得できる物語として組み込もうとするもののはずである。寺院の本堂で姉に抱かれたことによって母子合一化が果たされたのであるならば、自身の喪失体験を含む過去の物語へと立ち返り、語り直す必要はないはずではないか。また、語り直したことによって「われ」が満たされたのであるならば、その語り口を幼児の告白体とはかけ離れたものに加工することも、語

りの現在時を曖昧にすることもなく、自らの手で物語を閉じるはずである。実現不可能な欲望を求める故に、〈われ〉はその渴望を満たすことも、物語を自身の内に語り収めることもできない。そのために「われ」が物語へと立ち返り、繰り返し語っても、その欠如を満たして「自己」というものを確立することは叶わないのである。

語り手・「われ」による語り口の加工に加えて、物語への批評的な言辭がないことから、語る「われ」と語られる「われ」の距離感是非常に曖昧なものである。この語る「われ」も語られる「われ」もテキスト末尾において消失することで、テキストは物語の外部に位置する第三者的な語り手に委ねられ、一応の收拾を図ろうとする。

満たされることのない未完成な欠如としての〈われ〉は実在と非在との間をたゆたう存在であり、そうしたありようは同時代の文壇において広く描かれた固定貫徹された自己像（又はそれを求めようとするありよう）とは大きく異なる。「龍潭譚」というテキストは、こうした主体と非在の〈母〉を追い求める欲望とが連動することによって展開される。欲望が満たされないままに、実在にも非在にも行き着くことのできないありようを表出する本作は、「眉かくしの霊」のような後の鏡花テキストへとも繋がる、実在を越えた地平へと開かれる可能性を孕んだテキストだといえるのである。

## 注

(i) 「雲中語 龍潭譚」〔めさまし草〕明治二十九年十一月

同批評では、「是はlegendをかゝうとしてひき出し違へをしたる者なるべし。（中略）作者はさまぐに細工及彩色を加へたるがため、小説としては勿論其事荒誕に過ぎ、口碑的物語としては又人物の心意行動口吻皆あまり精細にして今めきたり」とも批判している。

(ii) 無署名「六佳選と初陣揃」〔文学界〕明治二十九年十一月

(iii) 以下に数例あげる。

作風を批判したものととして、無署名「六佳選と初陣摘」(『文学界』明治二十九年十一月)では、「何ぞ朦朧として雲の如く又夢幻の如くなる。(中略)然るに一の巻以来頻りに平静温和の材と軟弱の辞を振り舞はす」(傍点原文)と評している。また、戸川秋骨(署名は荒川漁朗)「文学 最近の創作界」(『太陽』明治二十九年十二月)では、「少年子に読ましむべきフェアリー、テールの類となさむか、(中略)余りに纖弱にして然かも架空的なに驚く」と批判した。

文体については、宮崎湖処子(署名は八面楼主人)「批評 小説六佳撰」(『国民之友』明治二十九年十一月)において、「鏡花は嘗て、其の題目と主張に適したる時文を有ちたりき。(中略)渠の師宗とする所の文源氏物語なるか、徒然草なるか、その捏くりたる、廻りくどくしたる節奏なき、何ぞ一に斯くの如くなるや」(傍点原文)と批判している。

(iv) 村松定孝「作品解題」(『鏡花全集別巻』岩波書店 昭和五十一年三月、『泉鏡花事典』有精堂 昭和五十七年三月)

(v) 笠原伸夫「憑依・母・少年」(『解釈と鑑賞 第三十九巻六号』昭和四十九年六月、『泉鏡花——美とエロスの構造』至文堂 昭和五十一年五月)において、姉と九ツ餅の女とに「母なるもの」の役割が付されているとし、「現実軸」では「姉・母」の関係には「現世的禁忌」が作用するが、「森林幻想譚」なる幻想軸では「女妖・母」の関係としてより「エロティックな構造をみせる」という、「母性思索のイメージ」の偏在性を指摘する。

藤本徳明「母胎のロマン——鏡花文学における聖界」(『鏡花研究 創刊号』昭和四十九年八月)では、シンボリズム的視点から鏡花作品を論じ、「鏡花における《山》と《水》のモチーフが、『母なるもの』への欲求、つまり、母胎への願望と不可分であること」を示した。

精神分析的視点から論じた吉村博任「豊穣なる退行——泉鏡花——」(『解釈と鑑賞 第四十八巻七号』昭和五十八年四月)、及び「神隠幻想——『龍潭譚』論——」(『鏡花研究 六号』昭和五十九年十一月、『魔界への遠近法』近代文芸社 平成三年一月)では、「龍潭譚」を「幼児退行とマザーコンプレックスの経過をたどる物語」として読み解いた。

また、松村友規「明治二十年代末の鏡花文学——作家主体確立をめぐる素描——」(『国語と国文学 第六十七巻第十号』平成二年十月)では、「非在の《母なる世界》を実体化する」方法として「鏡花文学固有の《異界》」を意味づけており、「死の界域」・「母のいる他界」である「九ツ餅」も同様の系譜に連なるとした。

(vi) 笠原伸夫「森、あるいは幻想空間」(『解釈と鑑賞 第三十九巻五号』昭和四十九年五月、『泉鏡花——美とエロスの構造』至文堂 昭和五十一年五月)では、他界にいる「母」が「怪しの姫」となって「地上の子」と出会う場所として「《森》」

を幻想界域と意味づけ、そこからの往還という「神隠し」の物語」として読み解いた。

種田和加子『龍潭譚』——泉鏡花の幼年世界——（『文学』第五十一巻第六号）昭和五十八年六月）では、隠れん坊による「社会喪失という比喩的な死」という越境の「移行儀礼」を経て、自らも「境界的存在」となった「千里」が原初的、神話的な「純粹に感覚的な深層の時間」を生きる物語と位置づけた。

赤坂憲雄「龍潭譚考——神隠しをめぐる精神史的考察」（赤坂憲雄編『物語という回路』新曜社 平成四年四月）では、『龍潭譚』が神隠し譚の民俗的な定型を踏んでいる」としてその道行きを詳細に論じた。

- (vi) 語りに着目したものととしては、山田有策「言語空間の呪術——文体と語りの構造」（『国文学』解釈と教材の研究 第三十巻第七号）昭和六十年六月、『深層の近代——鏡花と二葉 おうふう 平成十三年一月）において、『龍潭譚』末尾に現れる無人称の語り手に、『語り』による空間の変容」を生じさせて「一人称の『語り』を相対化」する鏡花独特の「『語り』」の発生を指摘した。

また、『龍潭譚』における古典や説話・伝承の受容について論じたものとしては、岡保生「『龍潭譚』について」（『文学・語学』第百二十二号）平成元年八月）及び「ふたたび『龍潭譚』について」（村松定孝編『幻想文学 伝統と近代』双文社 平成元年五月）、須田千里「鏡花文学における前近代的素材（上・下）」（『京都大学文学部・国語国文』第五十九巻第四号、同巻第五号）平成二年四月、同年五月）、堤邦彦「説話・伝承史のなかの鏡花——『妖怪年代記』『龍潭譚』の原風景——」（『文学』隔月刊 第五巻第四号）平成十六年七月）が挙げられる。

更に小林輝治「鏡花文学における被差別部落の問題——『龍潭譚』から『妖剣記聞』へ——」（『北陸大学紀要』第二十一号）平成九年三月）では、鏡花の故郷である金沢の被差別部落との関連からテクスト内の表記に着目して論じている。

- (vii) 脇明子「幻想の楽園を求めて 泉鏡花の楽園神話」（『日本の美学』第十七号）平成三年七月、『増補 幻想の論理』沖積舎 平成四年十一月）

- (ix) 鈴木啓子『龍潭譚』試論——鏡花の特権的自我の形成——（『淵叢・近代文学論集』六号）平成九年三月）

- (x) 「ウロボロスの父性」とは、河合隼雄『昔話と日本人の心』（岩波書店 昭和五十七年二月）で示された、日本神話の「スサノオ」のように「父性と母性の両方をブリミティブな形で共にもちつつも、なお父性の方に重点がおかれている存在」としたものを指すと鈴木論文ではされている。

- (xi) 越野格『龍潭譚』小解（『泉鏡花研究会編『論集 泉鏡花』有精堂 昭和六十二年十一月）

(xii) 佐藤朋之「記憶の憑代——泉鏡花『龍潭譚』について——」(『富山大学人文学部紀要』第二十四号)平成八年三月)

(xiii) 中谷克己「鏡花『龍潭譚』の世界」(『帝塚山短期大学日本文藝研究室・青須我波良』四十号)平成二年十一月)

(xiv) 前掲赤坂論文。

(xv) この姉の驚きを表す感動詞は、初出では『おや!』であった。「あれ!」に変更されたことによって、「われ」の顔を見た際の姉の驚きに不審、驚愕の感情をも読み取ることが可能となったといえる。

(xvi) 高橋昌男「母・殺しの幻想——『龍潭譚』をめぐる——」(『湘南文学』第二号)平成三年十一月)

(xvii) 東郷克美氏は「泉鏡花・差別と禁忌の空間」(『日本文学』第三十三卷第一号)昭和五十九年一月、東郷克美編『日本文学研究資料新集』12 泉鏡花・美と幻想、有精堂 平成三年一月、『異界の方へ——鏡花の水脈』有精堂 平成六年二月)において、「われ」を九ツ罅へと導いたのは「姉への充たされない渴望」であり、姉が自ら胸を開いたことによって「弟に心の平安をもたらす」と指摘するが、本論は非在の〈母〉を求める充足されない欲望に全ての始まりを求める。

(xviii) 初出では、「五位驚」において九ツ罅の女にも御仏と同じく「尊」を用いて「尊き人」と表記されていたが、後に「貴き人」と「貴」に変更されている。両者の存在を描き分けようとする書き手の姿勢が垣間見られる。

(xix) 前掲赤坂論文で「隠り世の水の女にたいする摩耶夫人の勝利の物語」とされるように、先行諸論の多くで九ツ罅の女は魔性のもの、ネガティブな存在として御仏や姉とは対立的に論じられてきた。「高野聖」のプロトタイプともされる九ツ罅での不思議な一夜にその一因があるが、少なくとも「われ」自身が女をそのような存在として語ることはない。また、母の死の再現も「われ」が「亡き母上」を女に重ねたことによって引き起こされたものであり、女が能動的に作用させたものではない。本論では、「われ」が三者それぞれに親和感情を抱いていること、そして三者とも「われ」を充足させる〈母〉にはならないことに着目し、三者が並置的に位置づけられる存在であると考ええる。

(xx) 九ツ罅への道行きにおいて「われ」は大沼のほとりで気を失い倒れたのであり、自分自身の足で女のもとに辿り着いたのではない。また、その帰途においても「老夫の背に負はれて」山路を行く。「われ」は自力で異界へと行くことも、里へと戻ることもできない。この老夫に背負われている状態、自分自身の「足」が地に着いていないという姿は、「われ」が満たされない欲望を抱えたまま、宙づり状態にされ続けていることを象徴的に示している。それと同時に、他者に支えられて安定しているという形は、御仏に抱かれる「をさなご」に自身を重ねる「われ」の姿とも相通じるものである。このような他者に支えられる身体のイメージは、本論で繰り返し述べてきた受動的な「われ」のあり方とも重なり合っているといえる。

(xxi) 本論では、存在が無くなる状態を不在とし、存在に先立って予め失われている欲望の対象として描かれる「虚」を非在とする。

(xxii) 例えば、河合隼雄氏は日本が母性社会であることを繰り返し論じており、「日本的心性」（江上波夫編『日本民族と日本文化』山川出版社 平成元年二月）では日本人の自我は全てを「包む」機能を優勢とする母性原理に基づいていると指摘している。また、江藤淳氏も『成熟と喪失——母の崩壊——』（河出書房新社 昭和四十二年六月）において、日本人の特に男性の「母」への強い依存が「近代」以降、より一層強化したとして「近代日本における『母』の影響力の増大」を指摘する。その上で江藤氏は小島信夫『抱擁家族』を取り上げて、「母」に拒まれた者である三輪俊介は、『母』の偏在を前提として成立」する『母』の影響力の強い文化」のなかにいるために妻を代替者として『母』の欠落を補わなければならない」と指摘する。

「龍潭譚」と『抱擁家族』とでは時代の開きがあるが、不在の「母上」像のために「われ」が非在の〈母〉を創り上げて執拗に求めるという構図の文化的背景を両氏の指摘から確認することができる。

(xxiii) 本論では、他者との関係性のなかで発生する、起源なき欲望は満たされることがないとするラカンや、生物的欲求と異なり、限らない欲望は満たされることがないと指摘する丸山圭三郎の欲望論を基底に置き、他者との関係性において発動し、非在へと向かう、満たされることのない「欲望」の意で用いる。

(xxiv) 同注（xiii）

(xxv) 笠原伸夫氏は注（v）の論で「女たちが母の代替として存在するかぎり、愛の成就是果たされない」として、「一之巻」から「照葉狂言」に至る少年を主人公とする物語を「姉・母」の構図のうえにひらく、『愛の不到達性』を描いた世界」と位置づけたが、本論は母子合一化が果たされない故を、笠原氏が指摘するような「女たち」の代替性ではなく、〈母〉そのものの原理的非在性に起因すると考える。

(xxvi) 本論では便宜的に「われ」を語られる対象とし、「われ」を語る主体として区別しているが、両者が別個の存在としてあるわけではなく〈われ〉という語において分かち難く結びついているものであると考える。

(xxvii) 本論では他動詞にかかるラ格、及びガ格成分を目的語として用いる。

(xxviii) 「龍潭譚」発表時と近接する同時代的な鏡花テクストのうち、「龍潭譚」と同じようなテーマが描かれている一人称体テクストとして「簀谷」（明治二十九年七月）・「化鳥」（明治三十年四月）・「清心庵」（明治三十年七月）の三作品が挙げられる。

「養谷」は主人公が山奥で美しい不思議な「女神」と出会うという構図をもつが、ここでは「予」という一人称が用いられており、全体が十二例、そのうちの一例が目的語である。「化鳥」、「清心庵」両テキストは主人公が〈母〉なるものを求めるという構図をもつ。「化鳥」では地の文において「私」という一人称が用いられ、語り手自身を示すものは全体で五十八例、そのうちの五例が目的語である。「清心庵」の地の文では「予」と「われ・我」という二つの一人称が用いられている。「予」は全体が十五例でそのうち一例が目的語であり、「われ・我」は全体が二十例でそのうち二例が目的語である。これらのテキストと比較して、「龍潭譚」ではその自己語りにおいていかに「われ」を目的語として多用しているかが分かる。

また、「化鳥」では「私の母様」というような連体修飾語として立ち現れるものが目につき、「清心庵」では「摩耶」に代表されるような〈母〉を思わせる存在と結びつけて語られる際に「予」や「われ・我」が立ち現れやすいことに気づく。詳細な考察が必要だが、鏡花テキスト群のなかの一人称体テキストを考えるなかで、少なくとも初期の〈母〉というものを求める物語を描いたテキストには書き手のある程度の意図を推し量ることが可能ではないだろうか。

(xxix) 本論では〈自己〉を「われ」と語った時に現象として立ち現れる主体の意で用いている。また、その言語化において述語を伴う主格として語られる主体を特に「主語」として用いる。

(xxx) 前掲の鈴木論文では、「われ」を里へと連れて行く「老夫」を「父性的な役割を担う存在」として位置づける。河合隼雄氏が日本人の自我の獲得について説いた「水底の三幅対」を援用した同論文では、この老夫の存在によって「父性の獲得がなされた」としている。この鈴木論文や注(viii)の協論文などで示されるように、確かに鏡花テキストにおいて度々描かれるこのような男性像は「父性的な役割を担う存在」である。しかし、必ずしも主人公たちがそれらの存在によって「父性の獲得」をなし得たとはいえず、ユング派的観点のもとに一元化してしまうことには疑問を抱く。少なくとも「龍潭譚」の叔父の「奈四郎」や「老夫」、それに「化鳥」の「父様」や「祖父さんの猿廻」などはラカンのいう「象徴的父」に組み込まれるものである。「象徴的父」とは幼い主体から〈母〉を引き離す審級のもの全てを指すが、母代わりであるにもかかわらず、「われ」が求める〈母〉とは反する言動を行い、時に突き放す「姉上」もまた「象徴的父」であるといえる。

(xxxi) 前掲の種田論文では、「奇妙な終り方」をするテキストの「不自然な筋立て」、及びテキスト末での「作者の語り」との交替を、前近代的な幻想が喪失した近代社会の枠組みのなかでは「千里は自分自身を語りつづけることができなかった」ためだとする。本論では、現実でも幻想でも満たされることのない「われ」の欲望にその要因をみると共に、そのように語ってしまう語り手・「われ」に着目する。

(xxxii) 同注 (ix)

〔付記〕

「龍潭譚」使用テキストは岩波書店版『鏡花全集』である。引用に際し、旧字体は新字体に改め、ルビは適宜省略した。なお本稿は二〇一〇年度日本近代文学会六月例会（平成二十二年六月二十六日、慶應義塾大学）での口頭発表に基づくものである。会場内外で貴重な御教示を頂戴したことを記し、ここに感謝申し上げたい。

（東京女子大学大学院博士後期課程人間科学研究科在籍）

キーワード

泉鏡花、「龍潭譚」、語り、欲望、非在の〈母〉、空虚、空白化、受動性